

さんちゅう ぎかくし 三忠の擬革紙

江戸時代の貞享元年（1684年）、伊勢国の油紙屋「三島屋」の初代堀木忠次郎（後に三忠）は、革の風合いを紙で表現した擬革紙を考案しました。神聖な神宮内へ動物の革を用いた製品を身に着けたままお参りすることは良くないとされ、擬革紙で作られた煙草入れなどは、伊勢神宮へお参りに訪れた参詣客のおみやげとして大人気となりました。

明治になると三忠などが製作した擬革紙はヨーロッパやアメリカの博覧会でも絶賛され、大量に輸出され壁紙にも使われました。

かつて擬革紙を製作・販売していた新茶屋の三忠があった場所は、今は「まちかど博物館」があり、擬革紙でできた製品など貴重な資料が見学できます。

擬革紙に関わりのある屋号

牛葉：乾家

明星：糸び屋、カミスキヤ、

ホンヤ、ヨロズヤ、山城屋

新茶屋：三忠、セコヤ、ダイコクヤ、

カザリヤ



まちかど博物館に展示されている擬革紙製作の道具など



擬革紙でできた小銭入れや名刺入れ



明治の頃の三忠での販売の様子

キーワード：伝統産業、新茶屋、擬革紙、三忠